John Donne の脚韻と当時の発音

垣田　章

1. 古音価推定と脚韻について

近代初期英語の発音を推定するに際して，音韻史研究家達によってとられてきた方法には大体三つのものがある。第一は正音学者 (orthoepist) と称せられる文法家の記述をたよりにして，当時の発音を推定する方法であり，第二は当時の私的書信や日記に散見される間違い綴字 (occasional spelling) 即ち伝統的綴字法から逸脱した綴字をもととする方法である。第三の方法は，この小論でその価値を再検討してみようとするものであるが，詩人の用いた脚韻を主なよりどころとするものである。従来の音韻史学者によって，これら三つの方法は全て同等の価値を有するものとして用いられてきたわけではない。一般に，脚韻による方法は，最も確実性に乏しいものとして拒けられるか，精々消極的に利用されてきたにすぎないと言ってよいであろう。英語音韻史の学問的基礎を築いた Alexander John Ellis は *On Early English Pronunciation* (1869—1889) において，脚韻によっては正確に音価を判断できないという結論を出している[1]。 Zachrisson の *Pronunciation of Enghih Vowels 1400—1700* (1913) では，脚韻による方法は全然無視されており， Wyld も *A History of Modern Colloquial Englih* (1920) で主として用いているのは第二の間違い綴字による方法であり，脚韻は補助的手段として用いられているにすぎない。比較的最近に於ても Dobson の *English Pronunciation 1500—1700* (1957) は第一の方法，即ち正音学者達の記述に対する精緻を極めた分析を基礎とするものであり，脚韻には重要性を認めていない。

このように，脚韻に立脚した方法が音価推定において軽視されてきたのは，

いくつかの理由があってのことであり，決して無意味に拒けられたといったものではない。第一に脚韻資料そのものの有する消極的性格が指適できる。A，B二つの語が互に韻を踏んでおり，それらが完全韻(perfect rhyme)であることが証明できたとしても，そのうちのいずれか一方の音価が確定されなければ，証拠としての価値がないのは自明のことである。その上完全韻の証明は必ずしも容易な作業ではない。発音変化が生じて，もはや同音でなくなっても，かって同音であった脚韻を詩的技巧として用いる traditional rhyme，綴字の一致に基礎をおき伝統的にも容認されたことのない eye-rhyme が，音声資料としての脚韻から排除されねばならない[2]。更に e Mod E に於ては，ME の諸方言に由来する doublet の存在が，脚韻の証拠力を減殺していることが多い。脚韻が音価推定において，補助的手段として用いられてきたのも当然のことと言えるであろう。

正音学者達の記述と，間違い綴字を基にした英語音韻史の記述が，時代を近世初期英語に限っても，各音の発達経過とその音価に於て，異論をさしはさむ余地のない迄に確立されたものであれば，その操作に当って危険性の大きい脚韻による方法を，あえて用いる必要はないであろう。しかし現在までの成果は各時代の音素体系の確立にはほど遠く，個々の音の発達経路についても異論が多い。従来提出されて来た多くの仮説に対するいわば験算の役目であっても，脚韻資料はもっと発掘されてよいであろう。

John Donne (1573—1631) と同時代人である Shakespeare (1564—1616) については，古くは Viëtor *Shakespeare's Pronunciation* があり，最近では Kökeritz による組織的な研究 *Shakespeare's Pronunciation*(1953) が出版されている。Kökeritz が Orthoepistic Evidence, Orthographic Evidence の他に Shakespeare に関する完全な Rhyme Index を作製し，脚韻証拠を積極的に用いていることは周知のことである。しかし彼の論考が多くの不完全韻を証拠として用いている点は疑問であり，不完全韻は証拠としての価値を持たないとする立場で Donne の脚韻資料を扱ってみた[3]。以

下の小論は，考察の範囲を独立位置の強勢を有する母音に限った Donne の発音の検討である。

2. Donne の発音

2.1 MEă

現代標準英語で独立位置の MEă は［æ］で発音されている。MEă の前方推移は15世紀初頭に Essex で始まり，15世紀前半には Suffolk, Norfolk に広がったとするのが Wyld の説である。Wyld そして Zachrisson も16世紀末のロンドン英語に於けるMEă は［æ］音であったことを示している。Kökeritz は Shakespeare の場合，生れ故郷の Warwickshire 方言〔a〕を，London で当時流行していた［æ］にのりかえたであろうという推定を下している。が，この推定には何の証拠もない。Dobson は MEă の二様の発音型が16, 17世紀の標準英語に共存していたとする立場をとる。保守的な［a］型と進んだ［æ］型のうち，後者は17世紀の前半に広汎に認められるようになり，1679年頃迄には注意深い話し手達によっても，一般に用いられるようになったとしている。Donne の脚韻証拠から，彼の発音に於て［æ］,［a］いずれの音が用いられていたかをつきとめることが問題点である。

Wyld, Kökeritz が rhyme によって MEă の［æ］音を間接的に証明する証拠として提出しているのは MEă : MEĕ の不完全韻だけである。Shakespeare の *am : gentlemen, at : debt, back : neck* (2x), *man : again* (2X), *matter : letter* を MEă の前方推移によって始めて成立した不完全韻，即ち［æ］:［e］の対立として解釈している。Dobson はこの解釈に真向うから反対である。彼は上記の脚韻が示すのは，MEă と MEĕ が同音になったという事実だけであるとし，それは MEă が［e］音えと推移したために起ったものだと説明する。更にこの MEă の［e］音は Wright

の方言音の記録から，スコットランド方言，北部方言，及びロンドン附近の方言に見られ，標準英語音の発達について何ら価値ある結論を，この証拠をより所として導き出すことはできないときめつけている。純粋なロンドン英語の話し手であったと想定される Donne の場合に，MEă, MEĕ の結びつきを示す脚韻が見出されれば，問題解釈の手掛りとなる可能性が与えられるわけであるが，Donne の Rhyme Index の中に上記の脚韻は一例も発見できない。Dobson の反駁の方に正当性を認めたいのであるが，単に存在しないという事実だけでは［æ］音を否定することにならない。

Donne の脚韻で MEă の音価を間接的に証明するものとして次の結合が挙げられる。

(1) MEă : MEā (ai) *begat : hate ; gat : wait ; hat : rate ; am : came* (2X) ; *am : name* (2X) ; *that : animate ; sat : adulterate*

(2) MEă : MEŏ *not : that*

(1)の MEā (ai) と MEă との rhyme は MEā (ai) に［æ:］,［ɛ:］,［e:］いずれの音価を与えても，MEă［æ］との不完全韻と考えられ，MEă［a］の発音を否定する有力な証拠となるようにみえる。しかしこれらの rhyme はすべて doublet（二重語）の存在から MEā : MEā 及び MEă : MEă と考えられる可能性を有するものばかりで，［æ］型の発音に対する確実な証拠とはなり得ない（後述 MEā の項に詳述）。(2)の MEă と MEŏ の間の rhyme は僅かに一例であるが，［a］型の発音に対して conclusive evidence を提出するものである。MEŏ の非円唇化音は，標準音としては［a］又は［ɑ］であり，［æ］は設定できない。

証拠は僅かであるが，Donne の発音では独立位置の MEă は［a］，つまり Dobson の保守的な発音型が用いられていたと推定される。

2.2 MEā, ai

Donne の脚韻で，MEā と MEai が同音であったことを示す証拠は数多

く見出される。Rhyme Index の中からそれらを捨って列挙すれば次のものが指適できる。*A : away, came : maim, dane : slain, flame : maim, frame : maim* (2X), *gale : assail, lane : pain, made : arraid, betraid, decay'd, embay'd, laid* (2X), *maid, said* (3X), *name : maim, pane : again, profane : fain, scale : prevail stale : fail, tane : again, slain, trade : betraid, whale : assail, fail, sail.* これらのうち *assail, maim, maid, fain, prevail* には MEā を有する doublet の存在が OED によって確かめられるから，MEā, MEai の証拠としてはその価値が疑わしい。この他に *India : away, Julia : say, Golgotha : stay, Moaba : lay, play* といった脚韻も Spenser, Shakespeare その他の詩人にその例のあることが Kökeritz によって述べられており[4]，MEā, ai の同音を示す証拠に入れてよいであろう。MEā, MEai が Donne の発音で同音であった事実が確認されても，どのような音価で同一音となったかについては二様の考え方が可能である。一つは MEai が単音化して MEā と合体したとする説で，Wyld, Kökeritz, Dobson など殆んどの学者はこの説をとっている。もう一つの説は，MEā が二重母音化して MEai と合体したとする主張で，Joseph Wright and Elizabeth Wright と O. Jespersen がこの少数意見を代表している。この二つの説の主張する発達過程を図示すると次のようになる。

(i) MEai の単音化説

MEā [aː] — [æː] — [æː] — [ɛː] — [eː] — [ei]

MEai [ai] — [æi] — [æː] — [ɛː] — [eː] — [ei]

(ii) MEā の二重母音化説

MEā [aː], [æː] — [ɛi] — [ei]

MEai [æi] — [ɛi] — [ei]

Donne の MEā, MEai の音価を推定する前提として，従来の音韻史家によってとられてきた二つの相対立する見解のいずれが正しいかを実証するためには， MEā, MEai の発達と連関した他の脚韻証拠を検討してみなくてはならない。それには次のものが Rhyme Index の中から挙げられる。

(1) MEā — MEē^2 : *space : peace*

(2) MEai — MEē^2 : *said : maidenhead*

(3) MEā — MEă (in independent position) :
hate : begat, rate : hat, came : am (2X),
name : am (2X), *desolate : at, animate : that,*
adulterate : sat

(4) MEai — MEă (in independent position) :
wait : gat

(5) MEā — MEă (before [f, θ, s]) *haste : fast, pac'd : hast,*
plac'd : cast, past, taste : cast, hast, waste : cast, last

(1), (2)の MEā, ai と MEē^2 との同音は MEai 単音化説をとる音韻史家にとって有力な証拠とみなされてきたものである。 MEai が [æi] > [æ:] の変化を経て MEā の [æ:] 音 と同音となり，この [æ:] 音が [ε:] 音へと上昇したときに MEē^2 の ME 期の音価 [ε:] と合体することになる。Donne の脚韻に於て(1), (2)共に僅か一例ずつしか見出されないことは注目してよい事実であろう。しかも(1)の *space : peace* は *peace* に MEai による異音が存在しており (OEDによる) , (2)の *said, head* には近世初期に短音が異音として存在していた証拠があり， MEā, ai の [ε:] 音又は更に一段と上昇した [e:] 音の証拠とはなり得ないものである。 Shakespeare には Donne に比べて(1), (2)の脚韻とも数多く見出され，Kökeritz の1600年頃 London に於ける current colloquial sound は MEā, ai 共に [e:] 音と

する証拠の一つとなっている[5]。しかし Kökeritz の提出した(1)の9例，(2)の6例の場合を個々に検討してみると，確実なものは一例もないことが既に明らかにされており[6]，1600年頃 MEā, ai, ē² の三音が同音になった証拠は脚韻に関する限り皆無に等しいと言ってよいであろう。

(3)，(4)の MEā, ai と独立位置の MEă との脚韻を個々に検討してみよう。*begat, gat* に MEā による doublet の存在が，*rate* には MEă による doublet が OED によって確かめられる。*am : came, name* については普通弱強勢を伴って発音される語の短音母が長母音化することは ME 以降証拠があり，従って *ām : cāme* の脚韻と解釈される。残る*desolate, animate, adulterate* はいずれも suffice *-ate* を有する場合で，*-ate* と *-at* がかなり動揺したことは証拠があり，これらは短音の間での脚韻と解釈してよいであろう。このように個々について検討してみると，(3)，(4)の脚韻は MEā, ai の conclusive な証拠とはなり得ないものばかりである。(5)の［f, θ, s］の前の MEā と MEă の脚韻について Kökeritz の解釈は，同種の脚韻は16世紀の詩人に屢々見られるもので，Shakespesare の頃までには eye-rhyme となっていたとする。Wyld も同様に考えて MEā ［e:］: MEă ［æ:］の不完全韻とする。しかしこれは MEā に対する［e:］音を前提とした解釈である。*haste, taste, waste, place, pace* には，いずれも MEă による doulblet の存在が OED によって確かめられる。［f, θ, s］の前の MEă の Donne の発音は［æ:］であったと考えられるから[7]，これらは MEā ［æ:］: MEă ［æ:］の完全韻と考える方が自然である。

Dobson は1650年迄の MEā に対する［æ:］音を普通の発音として推定しているが，その間接証明として MEār と MEē²r の区別の有無を手掛りとしている[8]。r の前の MEē² は［ɛ:］の音価から移動していないから，MEār と MEē²r の間に区別があった証拠は MEā［æ:］を証明するものとしている。Donne の Rhyme Index の中からは MEār と MEē²r の例は一例も発見できない。偶然的とみることも可能であるが，消極的な証拠とし

てこれも［æ:］音を支持するものとみることも可能であろう。

MEā, ai の脚韻証拠に関する今迄の所論をまとめると次のようになる。

1）MEā, ai の同音は疑えないが，MEā, ai, $ē^2$ 三音の同音を証明するものはない。

2）MEā, ai は［æ:］の段階にとどまり［ɛ:］，［e:］えの上昇は見られない。

3）脚韻資料からは MEā の二重母音化の直接証拠となるものは存在しない。

2.3 MEau

ME au が現在音［ɔ:］えと推移した過程は［aʊ］＞［ɔʊ］＞［ɔ:］であるとする説に対して音韻史家の間に異論はない。推移の第一段階は，二重母音［aʊ］の第二要素が第一要素を後退させる作用と，円唇化の影響を及ぼし，次の段階では，第一要素が第二要素を同化して両要素が同一になったものと説明できる。Kökeritz の推定する Shakespeare の発音は変化過程の最後段階つまり単長母音［ɔ:］であり，Dobson も正音学者によって，17世紀の初頭から単音による発音が記録されていることを認めている。Donne の脚韻には次のような ME au 相互間のものは勿論数多く見出される。***all : ball, call : fall*** (3X), ***draw : law*** (4X). 彼の発音で［ɔu］，［ɔ:］のいずれが用いられたかの証拠となるのは，ME au と $MEō^2$ の間の脚韻 ***thought, taught : wrote*** であり，これを完全韻として解釈すれば［ɔ:］：［ɔ:］による rhyme と考えるのが最も自然であろう。

2.4 MEĕ

MEĕ の発音について直接証拠となる rhyme は見出せない。しかし eModE の MEĕ の音価については学者の間に異論はなく，現在音［e］が Donne の発音であったと推定してよいであろう。Donne の Rhyme Index

の中には，MEĕ の［ɪ］えの上昇を示す次の rhyme が見出される。*yet : admit, fit, it, merit, sit, spirit, spit, beget : knit, forget : benefit, diocess : is, violence : since, innocence : since, patience : since.*[9] ある子音なし子音結合の前では，MEĕ が上昇する傾向があり，この傾向は現代の標準英語では消えてしまったものであるが，Donne の時代にはまだ存続していたことが明らかである。

2.5 MEē²

MEē² は現代標準英語では［iː］で発音されている。しかし現代標準英語のこの［iː］音は，MEē² の正常な音変化，つまり［εː］＞［eː］＞［iː］の変化によって生じた音ではない。MEē² の［eː］＞［iː］の変化は「音変化ではなくて，一つの発音型が捨てられて，別の発音型がとり入れられたに過ぎない」という Wyld の仮説は，その後の音韻史研究家 Zachrisson, Dobson, Kökeritz 等の間に異論はない。現代標準英語の［iː］音は，発生的には［eː］＞［iː］の変化をいち早く完了していた方言音が，標準英語に取り入れられたものである。図式的に示せば次のようになる。

MEē² ［εː］ → ［eː］ → ［eː］
　　└→ ［eː］
　　└→ ［iː］

Donne の脚韻も［eː］，［iː］両音の共に存在していたことを示している。

(1) MEē²—MEē¹ *leave : receive, deceive, conceive, read : proceed, displease : these* (2X), *please : these* (2X), *disease : these*

(2) MEē² (*break, great, steak*) — MEē² *break : speak* (2X), *weak : wreak, great : defeat, heat, jeat, meat, beat, eat, get*

(1)の脚韻は MEē¹［iː］との同音から［iː］音が Donne の発音に存在したことを推測させる。これらのうち *leave, read* は OEæ に起源するもので，ME期に ē¹ による異音の存在が確められている。注目すべきは OF 起

源の *please, disease* と MEē¹ との脚韻であるが，OEēa，(開音節の) OEĕ に由来する MEē² と MEē¹ との脚韻の例は一例も見出されない事実とも併せ考えれば，どの程度まで MEē² の [i:] 音が Donne の発音に浸透していたかは疑問である。(2)の *break, great* との脚韻は [e:] 音の証拠となるものである。break, great (及び steak) は現代標準英語で [ei] と発音され，古い型の発音が例外的に残ったものと考えられている。少数の脚韻の例から決定的な結論を導き出すことはできないが，Donne の発音には [i:]，[e:] 両音が共に存在したことは疑えない。

MEē² の quantity が不安定であったことは16，17世紀の発音一つの特徴をなしている。現在音 [i:] を有する語が，Donne の発音で [e] と短化されていることを示す脚韻として次のものが指適できる。*beast* (: *rest, detest, invest*), *beat* (: *yet*), *bequeath* (: *breath*), *bread* (: *fed, bred*), *east* (: *est, west* (2X)), *eat* (: *set*), *heat* (: *yet* , *read* (: *shivered, tread*).

2.6 MEē¹

MEē¹ の [i:] 音がいつ頃から用いられるようになったかについては，音韻史家の意見は一致していない。しかし Donne の時代には MEē¹ はその最後の段階，つまり現在音 [i:] の段階に達していたことについては異論はない。Donne の脚韻も次の二種類のものが証拠として指適できる。

(1) MEē¹ : -y, -ly (metrically stressd ending) *me : adultery, lechery, he : alchimy, she : destiny, see : history, thee : company, poetry, three : confusedly, these : faculties, etc.*

(2) MEē¹ : MEī

eve : drive, conceit : plight, Greek : like, seek : like, week like

(1)の名詞語尾 *-y* 及び副詞語尾 *-ly* に対しては［i:］又は［əi］の両音しか考えられない。 *eye : fallacy, presently, I : tyranny : willingly, fly: unevenly* 等の脚韻は数多く Rhyme Index の中に見出される。(2)の MEē[1] と MEī の同音は， MEī の解釈に問題が残るが， MEē[1] の［i:］に対する証拠として用いてよいであろう。 MEī の一般的な音は二重母音であったと思われるが， ［i:］音は19世紀もで残存して用いられた証拠がある。

MEē[1] ＞［ɪ］の短化現象は *been : capuchin, cherubin, herein, sin* (2X), *between : chin, greet : it, seen : begin* の脚韻にみられる。しかし *between* を除いてこれらの語には長音［i:］を示す脚韻もまた存在しており[10]，長音と短音による発音が彼の時代には共存していたと推定される。 *believe : live* は長，短音の証拠としては用いられない。 *live* には異音［i:］があり，この長音の方が流行音であったとも考えられるからである。

2.7 MEĭ

MEĭ が eModE に於て今日と同様に「ゆるみ音」(lax sound) であり，［ɪ］と発音されていたことについて異論はない。 Donne の発音でも［ɪ］が用いられていたと考えてよいであろう。直接の証拠となる脚韻はないが，MEĭ と MEĕ の間の脚韻は MEĭ の「ゆるみ音」の間接証拠となるものである。 *Hither : hether, together, spirit : merit.*

2.8 MEī

Donne の発音で，MEī の二重母音が用いられたことは明らかである。MEī の二重母音化は， MEē[1]＞［i:］えの上昇とほぼ同時期に始まり，17世紀には，［əi］ないしはこれに近い二重母音の段階迄到達していたとするのが，現在での定説となっている。 Wyld によって嘗って提出された［i:］＞［ei］＞［εi］＞［æi］＞［ɑi］の変化過程[11]に代って，［ɪi］＞［əi］［ai］のように考えるのが確実度の高い二重母音化の過程とされている。 Donneの

脚韻では，*like : seek, drive : eve* 等の MEē[1] との結びつきが見られるが，これは MEē[1] の [i:] 音に対する証拠とはなり得ても，MEī の音価については何の証明にもならない。これを MEī [ɪi] : MEē[1] [i:] の rhyme と解釈し，MEī の二重母音化は，やっとその萌芽がみられる程度であったとするならば，MEē[1], MEī 間の脚韻は，もっと数多く見出されるべきである。少数の語には MEī の [i:] 音による発音が用いられていた可能性があるとするのが，無理のない見方であろう。Donne の脚韻 *defiles : boiles* は，orthographical eviden と orthoepistic evidence によってその存在が疑いないものとされている二重母音を示すものである。MEoi の現在音は [ɔi] であるが，eModE には [əi] による異音の存在が確かめられており，MEī は [əi] であったと推定される。

MEī と MEīh(t) が完全に同音化していたことは，多数の脚韻証拠から明白である。*High : immortality, lye, pie, I, infinity, light : quite, might : quite, night : white.* これらの rhyme は，palatal fricative [ç] が当時未だ保たれていたとする正音学者 Hart, Gill, Butler 等の記述[12]が，方言音または archaic pedantic な発音の記述にすぎないことを証明するものとして価値を有するものである。

2.9 MEŏ

MEŏ に対する平唇音の存在は，*that : not* の脚韻で示されている。Kökeritz は Shakespeare に見られる同種の脚韻 *Tom : am, bob : crab* 等に対して，Warwickshire 方言を背景とする対韻の可能性を示唆している[13]。しかし MEŏ の平唇音については，Donne 以外にも Spenser, Swift に脚韻の例がみられる[14]。階級方言ないし地域方言に由来する異音として MEŏ [ɑ] はロンドン英語にも存在した可能性が充分に考えられる。

StE の MEŏ の現在音は [ɒ] であるが，eModE では，[ɒ] の他に *law, cause, all* の現在音 [ɔ:] の短音 [ɔ] も存在したと考えられている。

[ɔ], [ɒ] のいずれが流行音であったかは一つの問題点である。Kökeritz は MEŏ には ME 以後本質的な変化はなかったとする立場で [ɒ] を Shakespeare の音価に与えている[15]。Dobson は MEŏ は14世紀以降高い位置の [ɔ] から低音下を始め，[ɒ] 音の確立は1670年以後という結論を下している[16]。Donne の脚韻資料からはこの論争点について証拠となるものは見出されない。

2.10 MEō², ou

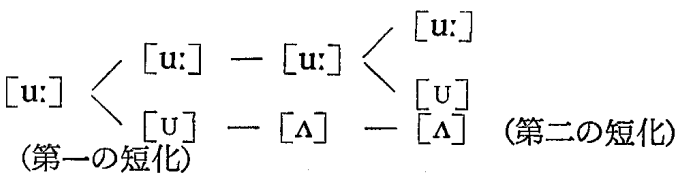
MEō², ou は Donne の発音で同音であったことは疑問の余地のない事実である。MEō², ou 間の夥しい脚韻のうち，以下その一部を列挙すれば，*ago : know, outgrow, bestow, alone : thrown, before : lower, bone : grown, disclose : knows, dispose : knows, dole : soul, go : owe, show, know, low, though, blow, flow.* (4X), *outgo : slow, so : flow* (3X), *grow* (11X), *show* (5X), *overthrow, stone : shown , whole : soul,* 等々があげられる。MEō², ou の同音によって生じた結果音については，MEā, ai の場合と同様に，MEou の単音化によって生じたとする説と，MEō² の二重母音化によるものとする説が対立している。ただし，MEā, ai の場合と比べて，MEō², ou の結果音が音素体系の上にもっ意味は同一ではない。MEā, ai の同音化の結果音が単母音であると，この単母音と MEĕ とが「長さ」を契機として対立することになり，PresE にはない「長さ」音素を設定しなくてはならなくなる[17]。MEō², ou の場合には，[o:]，[ou] のいずれの音価を推定しても，「長さ」音素設定の必要はない。Donne の脚韻からは，MEō², ou の音価を推定する根拠となるものは見出されない。前母音 ā, ai の推移過程と，後母音の推移がほぼ平行していたと考えれば，単母音 [o:] の可能性の方が大きい。

いくつかの中部，東部方言と北部方言では，MEō² は [u:] まで上昇した[18]。この変化の痕跡は次の脚韻にうかがわれる，*Home : come, become,*

whom, Rome : come, room. しかしこれらの脚韻は，Spenser, Shakespeare にも同様な例があり，traditional rhyme とも解される。Home には上記のものの他に，[o:]（または [ou]）を示す *home : roam* の rhyme があり，*lose : choose ; lose : those* の rhyme は，方言音に由来する異音 [u:] と [o:]（または [ou]）が共に用いられたことを証明するものである。*None, one* についての下記の脚韻は，MEō² の長音と短音 [ɒ]（または [ɔ]）が，これら両語に共存していたことを示している。*None : alone, stone, grown, unknown, anon, religion, construction, one : alone, grown, shown, stone, on, upon, opinion.* 更に，*alone : anon, note : forgot, poxe : ox* の脚韻は MEō² の短化が広範囲に及んでいたことを推察させる。*Anon, forgot* 自体が短化によって生じた語であるから，これらは *conclusive* な短音の証拠とみることができる。

2.11 MEō¹

MEō¹ > [u:] の変化年代については，諸学者の説にかなりの相違がある。しかし，遅くとも Donne の頃には [u:] であったことについては異論はない。問題になるのは MEō¹ の短化によって生じた三様の発音 [ɒ]，[ʌ]，[ʊ] 又び長音 [u:] が，当時どのように分布していたかである。MEō¹ の ME 期における短化によって生じた [ɒ]（*gospel, gosling* にみられるもの）は，ME 以降変化していないから，これは一応問題外としてよい。残る [ʌ]，[ʊ] 二様の短化音は短化の年代の相違によるもので，第一の短化によって生じた [ʊ] は平唇化されて現在音 [ʌ] となり，現在音 [ʊ] は [ʊ] > [ʌ] の変化が完了した後の短化によって生じたものと説明されている。図示すれば次のようになる。



変化の原則は上述の如くであっても，Donne の脚 韻資料が提出する長音と短音の分布の状態は極めて複雑である。便宜上現在音に従って分類してみると次のようになる。

(1) 現在音［u:］の語 *food : good, stood, blood, doom : room, room : become, come, groom, scrowl, tomb, womb, Rome, womb : come, become, home, tomb, moon : noon, soon, noon : soon, soon : Halcyon.*

(2) 現在音［ʌ］の語 *blood : flood, good, understood, under-wood, food, flood : blood, good.*

(3) 現在音［U］の語 *foot : root, good, blood, flood, manbood, motherbood, stood : stood : food, blood, book : look, mistook, took look : took.* この分類から推察できるのは，*food, good, stood, flood, blood* の諸語は二つあるいは三つの発音型を共有していたらしいこと，当時の分布は現在の様態とはかなり違っていたらしいという消極的な事実だけである。eModE における MEō[1] の分布を明らかにするためには，16，17世紀にわたる脚韻資料が更に集積されねばならない。

2.12 MEŭ

MEŭ は PresE では［ʌ］で発音されている。eModE の MEŭ が，どの程度まで平唇化し低音化した母音であったかは，未だ定説のない論争点の一つである。Dobson は正音学者の記述を拠り所として，StE において平唇化とそれに関連した変化は 1640 年迄受け入れられなかったとしている[19]。Kökeritz は［ɜ］，［ə］，［ʌ］のいずれかに近い音が Shakespeare の発音であり，16世紀末迄には，現在音［ʌ］と音性質の近似した音価が確立されたと推定する[20]。Kökeritz が［ʌ］ないし［ʌ］の近似音を推定する根拠の一つになっている脚韻証拠は *shudder : adder, punish : languish* の不完全韻で，これらを［ʌ］：［æ］の結合と考えている。Donne には *sun : affection, creation*の rhyme がみられるものが，これは完全韻として解釈

することが可能である。接尾辞 -tion の発音は [ʃən]，[ʃɪən]，[ʃiɒn] のいずれかかであり，この rhyme は [ə] 音の証拠となるものであろう。

Donne の脚韻には，平唇化した [ə] の他に，円唇音 [ʊ] もまた存在したことを示す ***pull : gull, put : shut*** の rhyme がある。唇子音に続く MEŭ は [ʊ] の音価を ME 以降保持しているから，MEŭ [ʊ] による対韻と考えてよいであろう。MEŭ に [ə]，[ʊ] の両音が共に用いられたという推定は上述のように脚韻の証拠があるが，一般的な音はどちらであったかは rhyme evidence だけでは決定できない。

2.13 MEū

MEū の二重母音 [əʊ]，[ʌʊ]，[aʊ] のうち，Donne の音価を決める手掛りとなる脚韻証拠は見当らない。前母音 ī と同様の発達をしたものと仮定すれば，[əu] が最も可能性の高い音価と云えよう。

3. 結　論

John Donne の Rhyme Index をもととして推定した彼の発音は，独立位置の強勢を有する母音については，次のょうにまとみられる。

(1) 短母音

MEă —— [a]　　MEŏ —— [ɒ] or [ɔ]

MEĕ —— [e]　　MEŭ —— [ʊ]，[ə]

MEĭ —— [ɪ]

(2) 長母音

MEā, ai —— [æ:]　　MEau —— [ɔ:]

MEē² —— [e:]，[i:]　　MEō² —— [o:]，[u:]

MEē¹ —— [i:]　　MEō¹ —— [u:]

MEī —— [əɪ], [iː]　　MEū —— [əʊ]

Kökeritz の推定した Shakespeare の音価と比べると，Donne の方がいわゆる「保守的」な発音が多く残っているという結論になる。脚韻資料の操作にあたって，Kökeritz が不完全韻を証拠として認めて，当時の新しい発音の存在を立証しょうとしたのに対して，不完全韻を音価推定の証拠から除去した立場からは上記の古い発音型の存在が確認される。詩と上演用脚本という資料上の差も考慮に入れなければならないが，eModE の colloquial sound には，ロンドン英語に限っても，いくつかの発音型の共存が考えられる。母音の音素体系の上からは，PresE の「長さ」要素を示差的特徴としない音体系は Donne の発音に関する限り未だ成立していない。MEē[2], MEē[1], MEō[1] には PresE に比べて広範囲の短化が生じているが，それらの分布の様態の解明は今後の課題の一つであろう。以上が John Donne の脚韻資料から得られた結論である。

〔註〕

1 Cf. Ellis, A. J. *On Early English Pronunciation* p. 865.

2 Wrenn は traditional rhyme, eye-rhyme の他に両者の性格を併せもった traditional spelling rhyme を分類する。しかし，これは eye-rhyme と本質的に同一のものであり，殊にとり上げて区別する必要は認められない。
The English Language (1949) pp. 90f.

3 Donne の脚韻資料はすべて Herbert J. C. Grierson, *Donne's Poetical Works, edited from the old editions and numerous manuscripts with introduction and commentary,* 2 vols. 1912から集めた。最も権威あるテキストとされている。

4 H. Kökeritz, op. cit., pp. 174—5.

5 H. Kökeritz, op. cit., p. 198.

6 Cf. 荒木一雄，「シエイクスピアの発音」『大阪市立大学人文研究 第7巻第4号』(1956) pp. 193—4.

7 [aː] または [ɑː] を示す *epitaph : laugh* の rhyme も存在しているが，これらの音が一般音であったとは思われない。

8 E. J. Dobson op. cif., pp. 595f.

9 これらの rhymed words のうち *since* は17世紀に［e］で発音された証拠があり，(Cf. Wyld, *Studies in English Rhymes from Surrey to Pope* p. 82), *violence, innocence, patience* の -ence は［e］音を有していた可能性も考えられる。

10 Donne の Rhyme Index には，*been : fifteen, Queen, greet : meet, seen : green* の rhyme がある。

11 Cf. H. C. Wyld, *History of Modern Colloquial English* [3] (1953) p. 223

12 Cf. H. Kökeritz, op. cit., p. 218.

13 H. Kökeritz, op. cit., pp. 224—5.

14 H. C. Wyld は Spenser, *plot : that* ("Death of Sir Philip Sidney), Swift, *younder : salamander* ("Description of a Salamander") の rhyme をそれらの見出される作品の重要性から注目すべきものとしている。(*Studies in English Rhymes from Surrey to Pope* p. 71.)

15 H. Kökeritz, op. cit., p. 222.

16 E. J Dobson, op. cit., pp. 556 f.

17 Archibold A. Hill, *Language* Vol. 29, No. 4 (1953) は，Kökeritz の Shakespeare 推定音を音素論の立場から体系化し，従来常識とされてきた eMod E の「長さ」音素を再検討する必要を強調する。

18 Cf. E. J. Dobson, op. cit., pp. 674. 及び H. Kökeritz op. cit., p. 231.

19 E. J. Dobson, op. cit., p. 587.

20 H. Kökeritz, op. cit. p. 240.